■□■

毎日のように降り続く雨に、太陽が恋しくなる季節。
不快指数が高まる日々にうんざりする一方で、それよりも頭が痛い行事が近づいていた。
学生である以上、避けては通れないテストの存在に、更に憂鬱な面持ちだった。
目前に迫ったテストのせいで部活も禁じられ、フラストレーションが溜まっていく。
3年生に上がった途端、着実に増えた模試だけでも厄介なのに、テストまで追加されると、自然とため息が漏れる。
普段ならコートを走り回っている時間なのに、テスト期間では、まだ明るい内に帰宅させられる。
それが、新鮮に思える時期も過ぎた菅原は、黙々と目的地に向かって歩き続けていた。
大雨ではないものの、傘が不要なくらいの小雨でもなく、止みそうな気配もない。
そんな中、一度家に帰ってから、再び出掛けるのは、本来ならば面倒で仕方ないが、今日は特別な日だった。
そのことを考えれば自然と頬が緩み、鼻歌まで出てくる自分に、我ながら単純だと思える。
のんびりした足取りで目的地に辿り着いた菅原は、躊躇することなくインターフォンを鳴らした。
数秒の沈黙の後、玄関ではなく2階の窓が開くと、そこから、ひょっこりと澤村が顔を出してくる。
「開いてんぞ〜」
雨が入ってくるからか、言いたい事だけ言って窓を閉める澤村に、菅原は軽く肩を竦めた。
それでも、許可が降りたことには変わらず、遠慮なく玄関を開けた。
「お邪魔しま〜す」
誰の出迎えもない中、一応とばかりに呟いた菅原は、そのまま澤村の部屋へ直行する。
通い慣れた家は、間取りも頭に入っており、今更迷いようがない。
「来たぞ〜」
豪快に大地の部屋を開け放った菅原は、いつもよりも少し物が散乱している室内に苦笑した。
そして、教科書や参考書、辞書などが、積まれたテーブルへ大股で近寄ると、スポーツバックを所定の位置に降ろす。

部屋の主と向かい合うように座るのは毎度の事で、すっかり指定席になっている。
今の時期、教科書やノートなどが大量に詰まったスポーツバックは重く、肩から下ろした瞬間、人心地付いてしまう。
軽い吐息を吐き出す菅原に、のんびりと顔を上げた澤村は、はにかむように笑った。
「よぉ、遅かったな〜」
単なる感想なのは、声の調子で分かっている菅原は、重い鞄を軽く引き寄せると、手前のポケットに手を入れた。
そして、苦笑しながらも遅くなった原因を引っ張り出した。
「帰りがけに捕まっちゃってさ」
横長の薄い封筒は淡い桜色だった事もあり、中身を見なくとも大体の見当が付く。
それを両手で持ち直した菅原は、不服そうに見つめていた澤村に、静かに差し出した。
困り顔の菅原と手紙を、何度か見比べた澤村は、すぐには受け取らず、訝しげに自分を指した。
「え・・、俺？」
目にした時から菅原宛だと思い込んでいた澤村は、大きく頷く菅原に、驚きのあまり瞠目した。
予想外の展開に呆然とする澤村を他所に、菅原は強引に手紙を押し付けた。
他人の想いが詰まった手紙を、これ以上持っていたくなかった菅原は、ようやく肩の荷が下りた気分だった。
本来なら喜ばしい話だが、菅原にとっては、預かるだけでも嫌だったのに、それを本人に届けるのは、更に苦痛でしかなかった。
そして、渡した後も、目の前であまり大喜びされると、悲しくなりそうで、敢えて視線を逸らした。
微妙な沈黙が流れていく中、数分が経過しても、動く気配のない澤村を、菅原は伺うように盗み見た。
てっきり喜んでいると思っていた菅原は、難しい顔付きで手紙を睨み付けている澤村に、思わず笑ってしまった。
「いくら見つめてたって、透視は出来ね〜べ」
からかいじみた声を漏らす菅原に、苦々しいため息を吐き出した澤村は、更に眉を顰めた。
女の子らしいが、読みにくい丸い字で書かれた『澤村大地様』の宛名が、これほど凶悪に見えるなど、

思ってもいなかった。
盛大なため息を吐き出しつつも、封をひっくり返しても裏側に差出人の名前もなく、開封を強制されている気分だった。
それが、余計に気に食わない澤村は、不機嫌な顔のまま菅原へ視線を戻した。
よりによって菅原経由で渡されるのは、何か別の挑戦を受けている気分だったが、それ以前に『預かってくるな』と言いたくて仕方がない。
しかし、それを告げたところで、面倒見のいい菅原が、実行できるかは謎だった。
全く嬉しくないと言えば嘘にはなるが、それでも一方的なだけの好意は、億劫でしかない。
もう1度だけ宛名を確認した澤村は、諦めたように封筒を裏返すと封を切り始めた。
今から読むのかとか、乱雑な開け方に億劫さが滲み出てるとか、言いたいことは色々ある菅原だったが、行動を止める気もなかった。
封筒には便箋が1枚しかなく、すぐに読み終えた澤村は、それを封筒の上へ重ねると、苦々しいため息を吐き出した。
そして、憂鬱な顔を隠す気もない澤村は、思い出したように、軽く掴んだ便箋をヒラヒラと振り始めた。
「あ、読む？」
手紙の主が聞いたら激怒しそうな無礼さだが、内容よりも差出人が気になって仕方がない。
不躾だと分かっているが、自分も似たようなことをしているせいか、それほど罪悪感も強くなかった。
素直に便箋を受け取った菅原は、本文はあまり読まずに、宛名だけを注視していく。
「あ〜、2年生だったんだ」
半ば強制的に頼んできた女子生徒が、本人かどうかまでは分からないが、見覚えのない生徒だったことは確かだった。
だからこそ、変に納得出来た菅原は、澤村に手紙を返すと、それ以上、口を開くのを控えた。
便箋を封筒へ戻した澤村は、見たくないと言いたげに、背後に置いてあるラックへ放り込んだ。
再び体を戻しかけた時、不意に視界に入ったカレンダーに目を向けると、思わず苦笑してしまった。
「あの時と逆だな」
思い出すように呟く澤村に、可愛く微笑んだ菅原

も、懐かしむように呟いた。
「もう1年も経ったんだね〜」
「早いよなぁ」
徐々に明るい声に戻っていく2人は、懐かしい日々を思い返していた。
そして、あの時期に起こった大きな分岐点が、今の自分達を作っている。
それを分かっているからこそ、忘れられない出来事でもあった。